2016－11 -10 前回（10 月 20 日）の感想・コメント

1. ナチ党によるユダヤ人排除において、排撃の対象となるのはユダヤ教徒ではなく、ユダヤ人であり、ユダヤ人はキリスト教に信仰を変えても差別をまぬかれなかったということですが、これまで自分はユダヤ人＝ユダヤ教徒という文脈[1]で理解してきました。ユダヤ人というのはユダヤ教徒の子孫である人々のことを指すのでしょうか。もしくは、反セム主義というときの「セミ語族」のこと[2]を指しているのでしょうか。ユダヤ人とヨーロッパ人の間に明確な人種的差異はなかった[3]と記憶しているので、「ユダヤ人の定義」に疑問を持ちました。
2. フランクフルトのポグロムの絵やシオニズムによるモーゼス・メンデルスゾーンのポスターなど、歴史の流れを踏まえた上で見ると、とても面白く感じました。「シオニズム」という言葉は聞いたことがあっても、今まで自分事として考えれていなかったため、理解[4]をしていませんでした。シオニズム＝昔の出来事と捉えようとしていた自分がいることに気付きました。

　しかし、今のイスラエル（パレスチナ）問題や安倍政権とイスラエルとの無線機技術

---

[1] フランス革命、18 世紀末葉から、ユダヤ人＝ユダヤ教徒の政治的社会的解放（同権化）が進み、その延長線上で、ユダヤ人（ユダヤ教徒）とキリスト教徒の結婚、ユダヤ教徒のキリスト教への改宗が進んで、ユダヤ民族＝ユダヤ人＝ユダヤ教徒という相互関係が次第に通用しなくなってきた。混交・混在の状態が次第に広がる中で、改めて人種主義的に区別＝差別しようとして、完全ユダヤ人（民族的ユダヤ人でユダヤ教徒）、2 分の 1 ユダヤ人、4 分の 1 ユダヤ人、8 分の 1 ユダヤ人といった混血度合いによる区別がなされ、ナチスはそれを差別的措置をとる度合い・対象選定において利用することとなった。その典型的な表現が、次回（すなわち 11 月 10 日）のテキスト範囲、61 ページの「ニュルンベルク法」（ナチス政府による 1935 年 9 月 15 日の法律）によるランク付け(ドイツ人血統、混血第二ランク、混血第一ランク、ユダヤ人－混血度により二つのランク)の表である。

[2] この点は、テキスト 23 ページ参照。これによれば、

　科学的な言語研究・言語の系統研究の成果として、「インド＝ゲルマン的」あるいは「インド＝ヨーロッパ的」祖語の発見。ペルシャ語とインド語の諸文書・・・話者はみずからを「アーリア人」と呼称。⇒「アーリア人種」

　これに対して、ヘブライ語もアラビア語も、その祖語は、「セム語」。ヘブライ人もアラビア人も「セム語族」。⇒「セム人種」

　したがって、この語族研究のレヴェルでは、ヘブライ人＝ユダヤ人もアラビア語をしゃべるアラブ人も、セム人種。

　ところが、ユダヤ人だけが、「セム的」とされ、ゲルマン人は「アーリア的」とされるようになる。こうした中間段階を経て、反セム主義 z ＝反ユダヤ主義となる。

[3] インド＝ヨーロッパ語族を「アーリア人種」として一括りにし、ユダヤ人（ヘブライ語）とアラブ人（アラビア語）のセム語族を「セム人種」として一括りする人種主義的見方では、「差異があった」ということになる。

[4] 「聞いたこと」、「知っていること」と、その言葉の内容・内実を「理解している」ということとは別ですね。有名な世界的哲学者ヘーゲル（18 世紀から 19 世紀初頭のドイツ・ベルリン大学）は、「知っていることと理解・認識していることとは別のことだ」（Was bekannt, ist nicht erkannt）と喝破しています。

（軍事協力）の開発など、もろに現在の私に関係があることだと知り、その瞬間危機感を抱きました[5]。また、歴史を歴史として捉えてはいけないこと、自分事として考えるとより集中できるし面白いし、現状をとらえる上で、本当に大切なことであると実感しました。

3. P.35 下の段の、1923 年 11 月にヒトラーが一揆[6]を起こしたとありますが、これがどうしてなのか、分かりませんでした。
4. 何でも全てユダヤ人のせいにする反ユダヤ主義の考え方はどの視点に立って見ても不条理すぎるし矛盾だらけなのではと思いますが、その思想を根底に於いてあれだけ巨大な虐殺を行えたのはどうしてだろうと、不思議でなりません。

   しかも、それが今も完全に立ち消えたわけではなく、合理化が進む社会で、合理的とは言えない考え方が続いていることが、不思議[7]です。
5. 私も大学に入り、いろいろな意見や日々のニュースを解説してもらう中で、今の安倍政権が特徴的なナショナリズムの考えを持つ政権であるということを知りました。右派とか右翼と聞くと、何か過激なものに感じてしまいましたが、知らず知らずのうちに政府とかより、そうした考えの影響を受けているのだと痛感しました。悲しいことですが、ナチス下のドイツ国民も同じなのではないか[8]と思いました。だからこそ、とても支持がある訳ではないが、政権を持つことができたのではないかと思いました。
6. 現在の世界の動向は、必ず過去に原因があるわけで、安倍政権をはじめ、最近は少し支持が下がってきたようだが、トランプや、フランスの FN（国民戦線）など、右翼が幅を利かせ始めたこと[9]に、不安を覚える。

---

[5] 私たちが知らないところで、「知らされていない」事柄、「秘密にされている事柄」で、危険なものはたくさんあるでしょうね。史料や講義などの場を通じて、より広く深く世界認識が進むと素晴らしいですね。

[6] 1923 年の政治的経済的混乱状態に乗じて、武力的に政権を取ってしまおうとした一揆＝クーデター事件・・・ここではヒトラー一派は、オデオンプラッツまで行軍したそきに、バイエルン州の警察力により鎮圧される。

[7] 「不思議」こそは、探求の重大な促進要因。現実に、どのような要因が積み重なった場合、不条理きわまる考え方が、大量虐殺に結び付くのか。

大量虐殺が始まるのか、独ソ戦になってからです。1941 年 6 月のソ連への奇襲攻撃、1941 年 12 月までのドイツ軍の電撃戦戦略の挫折・敗退の危機・危険、こうした事情こそ、大領虐殺の決定的要因となります。今後説明をしていきますが、さしあたりは、研究室 HP『ホロコーストの論理と力学』を見てください。

[8] ナチス時代の政府が圧倒的な力を持ち、反対諸政党を弾圧したり解散に追い込んだりした状況とは、今日の日本は違っていますね。どこまでが、どのように共通しているのか。違いはどこにあるのか。検討すべき問題はたくさんあります。

[9] どのような原因があるのか、いろいろと指摘されています。その諸要因をじっくり検討してみる必要がありますね。次の人の感想に、ナチ党支持率急上昇の要因として、世界恐慌があることを指摘しています。これまた、決定的に重要な要因・原因ですね。トランプやフランスの FN が喧伝していることは、まさに、白人の様々の要因からくる苦境ではないでしょうか？

ナチの当時の活動の仕方を見ても、現在、右翼が韓国・朝鮮をユダヤのように敵対化し、日本国の力を強めようとしている姿は、重なるところもあるだろうか。「日本会議」が気になったので、調べてみようと思いました。

7. ナチスに対する支持率のグラフを見ると、いかに恐慌の後の不安な心にナチが付け入ったかということが分かった。
8. モーゼス・メンデルスゾーンが一番最初のドイツ人であるユダヤ人だ[10]と認識したのですが、間違いないですか？彼が本当にそうならば、きっかけを知りたいなと思いました。また、生誕 200 年のポスターだったので、ドイツにおけるユダヤ人の歴史は浅いのかなと思いました[11] 『ヴェニスの商人』の例で触れていたように、ステレオタイプにとらわれたものの見方はとても怖いと思いました。
9. 3 章を読み、1919 年に民主的で人種による差別のない憲法が存在していたにも関わらず、それに反する考えを持つ人が同時期にいて、1920 年代を経て、最終的に憲法に反する側の人々の考えを持つ人が政権を握る、という恐ろしい流れがあったのだと思いました[12]。

   さらに、その頃に損竿した「ドイツ民族攻守同盟」には、憲法の意義を知るはずの教師[13]や弁護士が加わっていたという事実にも驚きました。

---

[10] この主張は、ドイツのユダヤ人哲学者・啓蒙思想家 1729 年 9 月 6 日生まれのモーゼス・メンデルスゾーン（世界的作曲家として有名なフェリックス・メンデルスゾーンの祖父）の生誕 200 年記念のポスター（1929 年）の文言です。

ポスターで主張していることは、「ユダヤ人であるが、最初のドイツ人だ、ドイツ人と同等・同権の最初のユダヤ人」だということです。ユダヤ人が如何にしてドイツ人となりえたか、その地位を気付いてきて同化してきたいと強調する意識・文脈です。「事実として、最初の」ユダヤ系ドイツ人だということを主張しているとは言えないでしょう。

[11] 「ドイツにおけるユダヤ人の歴史」と、ドイツにおける「同権の市民としてのユダヤ人」との間には、中世以来の長い差別・抑圧の歴史があります。そして、市民として、キリスト教徒と同権であり差別されない状態、これが「ユダヤ人解放」の歩みであり、それは、フランス革命以降のヨーロッパの発達、市民革命・市場社会・資本主義社会の発達の中で、進展したことです。宗教の世俗化の進展、その過程でのユダヤ教徒の市民としての同権かなどが進行します。一つの参考文献：内田俊一「モーゼス・メンデルスゾーンの生涯」

[12] 第二次大戦の敗北の結果として、当時の世界―今日でも―で、最も民主主義的な憲法を持つ日本においても、戦前型の日本がいいという人々がずっといましたし、「押しつけ憲法だ」と主張し続けて、「憲法改正」を主張する勢力がいました。現在、一つの大きな勢力となっているのが、前回も指摘した「日本会議」です。これは、そのような「憲法改正」を推進しようとする潮流の人々です。安倍首相もその中心人物の一人です。自民党の憲法改正案の中に、そのような発想（天皇の元首化、9 条の改廃による国防軍の保持＝自衛隊の国防軍化、戦力保持の合憲化など）がみられます。詳しくは、自民党改憲草案を見てみる必要があり、また、そのどこが問題なのかを指摘したたくさんの文献もありますので、その検討が必要でしょう。たとえば、「自民改憲草案の怖さ」（弁護士・升永英俊）

[13] 「教師」や「弁護士」は、必ずしも、憲法の捉え方が同じではないということです。右派の教師・弁護士と中道派の教師・弁護士、左派の教師・弁護士といった潮流があり、ワイマール憲法に対する見方・スタンスが潮流ごとに違っていたということを、見ておく必

もう一点、3章から分かったのは、反セム主義を支えたものとして、出版物があるということです。現代にも言えると思いますが、メディアが人々の考えを動かす力は、確かに存在する[14]のではないかと思いました。

10. 「匕首伝説」が、かなりこじつけだなあと思った。ナチ党の選挙対策の手の込みよう、・・・ここまで露骨な選挙活動をしたら、どんな人でもナチへの投票を控えるのでは？と思った[15]が、難しいものだと思った。

11. “反ユダヤ主義”について、とてもよく分かりました。当時ドイツでゃすべての責任は“ユダヤ人”にあり、今後、戦争や裏切り行為をなくすためには“ユダヤ人”が存在してはいけないという思想があったのですね。

また、元々ナチ党は支持されていたわけではなく[16]、…ナチ党が禁止されていた期間があった[17]なんて、驚きだった。1928年当時は、受け入れられていなかったはずのヒトラー率いるナチ党が、世界大恐慌という経済の不安定さから支持され始め、人々は次第にヒトラーの「ユダヤ人種」非難・断罪・攻撃の演説を聞いていく。そこで、「ユダヤ人」に対する差別がひどさを増していき、最終的に”ホロコースト“を引き起こしてしまった。

前回から今回の授業で、その流れと理由を具体的に理解することができました。

最近、北朝鮮から脱出した方（脱北者）のインタビュー映像を観る機会がありました。彼らは、幼少期の頃から、“＾北朝鮮が一番の国”であったと本当に思っていたと話していました“ホロコースト”もそうですが、愛国心がおかしな方向へ進み、明らかに“おかしな”ことが当たり前になってゆくナショナリズムは、恐ろしい。

要があります。

[14] まさにその通りです。たくさんある「メディア」にも、いろいろの政治的立場や憲法観があります。よく指摘されるのは、右の産経新聞、読売新聞、それに対してやや左の毎日・朝日新聞、東京新聞といった各新聞のスタンスの違いがあります。昨年の「安保法制」）戦争法制）に対する立場・態度も、これらの諸新聞で随分違っています。これまた、検討してみる必要があります。

[15] 強烈な主張であるだけに、共鳴する人々も一定の数いたということ、それが、世界経済恐慌を契機に、一気に増えたということ、このあたりの背景をじっくり検討してみる必要がありますね。

現在の日本でも、どぎつい「ヘイトスピーチ」に共鳴する人がいるわけですし、先日の大阪から沖縄に派遣された機動隊員の沖縄の人に対する「土人」呼ばわり、「シナ人呼ばわり」をみると、そうしたどぎつい差別表現が、ネットなどを通じてかなり広まっていることも考えられます。決して、昔のことではない、とも言えます。

ナチス・ヒトラーの言説が、どのようなものだったのか、洗いなおしてみる必要がありますね。

[16] 投票率でみたようにミニ政党でした。

[17] クーデター計画（ミュンヘン一揆）を起こし、武力で政権を握ろうとしたわけで、逮捕投獄され（約1年間）、ナチ党は活動できない（演説などできない）期間がありました。